



Title	＜書評＞「公衆衛生の論点 その記録」（多田羅浩三、左右社発刊）の書評
Author(s)	高鳥毛, 敏雄
Citation	大阪公衆衛生. 2020, 91, p. 26-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

「公衆衛生の論点 その記録」 (多田羅浩三、左右社発刊) の書評

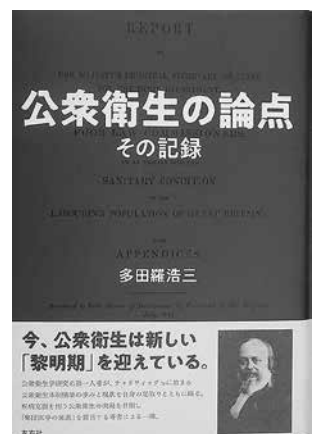
高鳥毛 敏雄

大阪公衆衛生協会・専務理事

「公衆衛生の論点 その記録」が、2019年4月24日に出版されています。著者は、大阪大学医学部公衆衛生学講座名誉教授の多田羅浩三先生です。本会の保健計画部会長として、長年大阪公衆衛生協会を支えてこられ、その後日本公衆衛生学会理事長として、さらに日本公衆衛生協会会長として平成時代の日本の公衆衛生の中心におられた先生です。

著者の多田羅先生が歩んで来られた時代は、戦

後の復興期、高度経済成長期、公害の時代を経て、社会のまさに激動期であったと言えます。保健所を基盤とした結核対策、母子保健事業が成果をあげ、人々の疾病構造が大きく変化したことで、新たに



市町村を主体とした生活習慣病に対する保健事業の推進が求められるなど、わが国の公衆衛生活動のウイングの拡大が強く求められる時代でした。

大阪大学医学部公衆衛生学講座初代教授の関悌四郎先生は、1970年に「集団医学の発足（原点からの発足）」を出版され、日本の公衆衛生の展開の軸として「集団医学の推進」を提唱されました。本書の「大阪の公衆衛生」によると、関先生は大阪府衛生部の中谷肇先生の協力のもとに大阪府立成人病センターの開設（1959年）を計画され、センターに調査部を設置し、その部長は関先生自らが担い、そして、病院よりも先に集検棟の建設を優先し、循環器検診部門、胃がん診断部門などを設け、小町喜男先生、藤本伊三郎先生らに循環器検診、胃がん検診、施設集検、地域がん登録事業などの展開を託されました。小町先生らは府内の八尾市にとどまらず、秋田県井川村、高知県野市町など脳卒中死亡率の高い地域をフィールドとして、循環器疾患の予防と管理の調査研究と実践を行っています。そしてこれらの地域における保健予防活動の実績などがもとになり1982年、老人保健法が制定され、全国の市町村における保健事業の推進につながっています。その後、2008年に高齢者の医療の確保に関する法律が制定され、新たに医療保険者を主体とした「特定健診・保健指導」が発足しています。この「健診」「保健指導」の推進は、まさに新たな「集団医学」の実践と言うことができます。こうして著者は、わが国の「集団医学」の新たな地平が「大阪の公衆衛生」を基盤として切り開かれたものとして強調されています。

鹿児島で開催された第76回日本公衆衛生学会総会において発表された「公衆衛生黎明期からこれまでの歩み」はわが国の公衆衛生の歴史の歩みを記した文章として貴重だと思います。また、わが国の公衆衛生は数々の先人の知恵に学んできたものであることを忘れてはならないとして、「先人の論点」の章において、緒方洪庵、福沢諭吉、長与専齋、徳田虎雄、伊能忠敬、松浦十四郎など多くの偉人の貴重な功績を紹介されています。

著者は、医学生時代に大阪大学アジア医学踏査隊、そして全国の行脚旅行を計画、実践されています。そして「インターン制度廃止闘争」を経て、公衆衛生の道に進まれています。本書の「青年のロマンス」「青年の反抗」の章に、その頃の自らの想いを詳細に記されています。当時、日本経済の力強い発展が学生の著者の冒険旅行を可能とし、しかしそこに生まれていた社会の矛盾に我慢できなかったと著者は書いておられます。

「公衆衛生の論点 その記録」という本著のタイトルについて「あとがき」で、「制度」に対して「知恵」、「社会」に対して「個人」が、どれだけ大事にされてきたかというのが、「公衆衛生の論点」であると述べておられます。そして「公衆衛生の論点」という視座を世に問いたいとして本著をまとめたと記されています。そして「極端」にではなく「中庸」の中にこそ道がある、「妥協」の中にこそ長い改革への道があるということを、当時の「反攻」は教えてくれたと思っている、とされているのは貴重であると思います。

「制度」が立派に育つためには、人々の「知恵」が育つ社会の実現が不可欠です。「制度」と「知恵」の両立した公衆衛生は、感染症対策においてとくに問われます。そのことは、現在、新型コロナウイルスとの闘いが、中国で始まり、日本、韓国から、イランへ、さらにイタリアをはじめとした欧州、さらに米国に広がっています。各国の公衆衛生の在り方が問われています。公衆衛生の緊急事態となっている中で、全国の皆さんが「社会の制度」、そして「個人の知恵」の二足の重要性を改めて深く認識されていると思います。

次代の公衆衛生の確立が今、急がれています。そのためには、長年、日本の公衆衛生の発展に貢献してこられた公衆衛生の先人である多田羅浩三先生の「公衆衛生の論点 その記録」は一読が必要な書です。是非とも、手に取ってみて下さい。

著者略歴

大阪大学名誉教授。

- 1941年 香川県生まれ。
- 1966年 大阪大学医学部卒業。
- 1976年 大阪大学助手医学部（公衆衛生学）。
- 1979年 イギリス・ケント大学保健サービス研究所客員研究員。
- 1981年 大阪大学助教授。
- 1987年 大阪大学教授。
- 1999～2005年 日本公衆衛生学会理事長。
- 2000年 ロンドン王立内科医学会特別会員。
- 2004年 放送大学教授/大阪大学名誉教授。
- 2010年 財団法人日本公衆衛生協会理事長。
- 2011年 財団法人日本公衆衛生協会会長。
- 2012～2019年 一般財団法人日本公衆衛生協会会長。